提言

研究者・教育者の本懐

宮田 隆志

化学生命工学部　化学・物質工学科　教授

「本懐」という言葉に初めて出会ったのは、学生時代に読んだ「男子の本懐」（城山三郎著）である。東京駅構内の新幹線への改札近くの柱にプレートが掲げられており、その足下に小さな目印がある。1930 年 11 月 14 日に当時の内閣総理大臣 濱口雄幸が銃弾に倒れた場所である。その濱口の言葉の「すでに決死だから、途中、何事か起こって中道で斃れるようなことがあっても、もとより男子として本懐である」からその本のタイトルは引用された。

現在、筆者は大学の教員として研究と教育に携わっている。国の行く末を左右する内閣総理大臣が決死であるのに対し、筆者の仕事は決死といえるかどうか…。しかし、どのような仕事であっても、それぐらいの気概を持って望みたいと若いときに感じたことを覚えている。では、研究者や教育者の本懐とはどのようなものであろうか。研究者としては、どこかで見聞きしたような二番煎じの研究ではなく、世界初のイノベーションとなる研究を行いたいと強く思う。学術研究による新しい発見や応用研究による社会への直接的な貢献が研究者の目標である。本プロジェクトでは、特に「人に届く」関大メディカルポリマーとして、医工連携によって患者と医師に届く医用材料と技術の開発が推進されている。本プロジェクトの成果が病で苦しんでいる方々の治療に役立ったときに、初めて本懐を遂げたといえるのであろう。同様に学生時代に読んだ「匠の時代」（内橋克人著）第 5 巻では、倉敷中央病院とクラレによる人工補助肝臓や東京女子医科大学と東レによる人工透析装置の開発物語が紹介されている。本プロジェクトの模範となる医用材料研究の歴史の一つであり、この分野での本懐を遂げられた研究者の気概には今読み返しても心が震える。

一方、教育者としては、学生たちの潜在能力を引き出し、社会に貢献する研究者や技術者を育成することが使命である。育った環境も時代も全く異なる若い学生たちとの会話は、宇宙人と話しているように感じるときもある。彼らの人生の中では筆者との時間は円と円との接点のような短い時間かもしれない。しかし、筆者自身が恩師に強く影響されてきたことを考えると、教育者の責任の重さを痛感することも多い。企業研究者から卒業生が活躍しているとの話を耳にするたびに、当時の顔を一人ひとり思い出しながら教育者として本懐を遂げた気持ちになる。また、研究でも如何にして次の世代へとバトンタッチを行うか、そのためには今何をなすべきか、これも次世代の教育と研究の発展には重要な課題である。学会などで若い研究者から筆者の研究や論文などが役に立ったと言われると、研究者としてだけではなく、教育者としても率直にうれしく思う。先日 KUMP 国際シンポジウムの基調講演者である東京女子医科大学の岡野光夫先生と昼食をご一緒させて頂いた際、「教授の役割とは良い論文や良い技術を発表するだけではなく、境界領域などでは専門や背景の異なる研究者をまとめて挑戦するアカデミアを築くことである」とのお話があった。医用材料分野を牽引されてきた先導的研究者の重みのある言葉である。

学生時代に大学教員を目指していなかった筆者が、多くの方々とのご縁によって関西大学で研究と教育を行う機会を頂き、ここまで続けることができた。人生、何が幸いするかわからないものである。国語のテストのために覚えた「人間万事塞翁が馬」という諺の意味を、最近は実感することも多い。研究者として、教育者として、自分の本懐は何であろうか。どこに辿り着けば本懐を遂げたことになるのであろうか。自問自答しながら日々の研究・教育に没頭し、濱口元内閣総理大臣のように「本懐である」といえるような気概を持って仕事に取り組み続けたい。